KSKQ ゆうとおん通信

NO.115	2020 年 1 月号	郵便振り込み口座 00910-9-106532
編集人 （社福）ゆうとおん 編集員会 八尾市久宝園 2-30-4		

一九九一年 九月三日 第三種郵便物承認 毎月（一・二・三・四・五・六・七・八の日）発行 定価５０円

謹賀新年

今年も、ゆうとおんを
よろしくお願いいたします。

２０２０年 元旦

目次

・第25回ピープルファート大会 in 大阪 報告 ……（2）
・支援の現場から 山本 寿 / 安井 仁 / 松野 香織 ……（6）
・現場の悩みを一緒に考える 豆子 寿士 ……（8）
・ゆうとおんまつり報告 ……（9）
・当世作業所事情№77 畑 健次郎 ……（10）

昨年の 11月29～30日の2 日間にわたり、大阪国際交流センターでピープルファースト大会が開かれました。全国から９３９人の参加があり、熱気あふれる大会になりました。

ゆうとおんからは４２名が参加、ゆうとおんバンドが演奏を披露し、きめる会が分科会「わたしのしごと」を担当しました。

全体会は、ピープルファースト２５年の歴史をふりかえり、障害者権利条約、優生保護法当時の強制不妊手術に対する裁判報告、津久井やまゆり園の現状報告、また福島のピープルファーストから災害と避難に関して障害者が直面する問題について報告がありました。２日目の大会終了後に、「塩田さんの復職と欠格条項の違憲性を問う裁判の報告集会」も開かれ、ここにも多くの当事者参加がありました。

第25回 ピープルファースト大会 in 大阪に参加して

テーマ

なかまと ともに 幸せに 地域でくらそう

主催/ピープルファースト全国大会実行委員会
後援/大阪市/大阪府社会福祉協議会/大阪市社会福祉協議会

ゆうとおんバンド 参加者の感想

人がいっぱいで、びっくりした！
がんばった！バンド、たのしかった！
緊張したけど、キーボードがんばった。
ギターひきました。よかった！

ゆうとおんバンドたのしかった！マラカスふった！
練習の時「本番どうなるやろ」って思ったけど、完璧！
はじめての参加。よかった。また行きたい。

全体会の司会を担当した宮田さんと寺田さん

宮田…司会は人のことば（原稿）で話すのがむずかしかった。会場で手をあげてくれた人をあてるとき、マイク係にあてる人の説明をするのがむずかしかった。
でも、行ってよかった。行かなかったら、仲間とであうことも共有もなかったから。

寺田…朝の練習では大丈夫だったけど昼のお弁当を食べているときから緊張した。帰ってから足ガクガクだった。来年は大会がないから残念やけど、2021年はまたピープルファーストに行きたい！

閉会式で
スローガンを読む岩井さん

岩井…緊張したけど、ばっちりです。
自分に点数をつけるなら１００点満点中の１０００点です！

分科会

わたしの しごと

二日目は分科会がありました。ゆうとおんは「わたしのしごと」を担当しました。全国から参加したみなさんと活発な話し合いができました。

・高槻市のS会社で食堂の補助をしています。楽しいです。給料は高いです。ガイドやほかの活動に使っています。
・大津市でクッキーの仕事をしています。機械をつかうので少ししんどいです。
・東京から来ました。スーパーで青果の袋づめをしています。倉庫の中を通るので触ってしまう。どうしたらいいですか？
・「さわらない！」って張り紙してもらったら？
・高校の食堂で働いているけど、洗い場の蛇口の長さが違うのでやりにくい。どうしたらいいですか？
・ふみ台にのってやったらどうかな？

・自分で働ける間は働きたい。お話を考えるのがすきだから、発表なんかしてみたい。ライン始めました。フェイスブックなども利用して、いろいろな人とつながったりしたい。
・一般の仕事でもっとお金をかせげたらいいな。
・もうちょっと給料ほしい。
・給料の格差をなくす取り組みをピープルファーストでやってほしい！

・京都からです。怒られてしんどくなってやめて 20 年間仕事してなかった。最近始めました。お寺で週 1 回藍染めや掃除や販売の仕事。楽しいです。
・茨木の運輸会社の倉庫で働いて 10年。こきつかわれている。給料は旅行なんかに使う。
・小さい子どもがすき。将来は保育士になりたい！
（資格とってガンバレ！の声）
・みんなの話を聞いて、障害者と健常者の給料の違いに腹立つ。人間である限り平等でないと！

●「ピープルファースト」、いままで私はこの言葉を聞いたことはありませんでした。

毎月１度、ゆうとおんでは「みんなで決める会」の集まりがあります。有志のメンバーさんが中心となって会議を進めていくなかで、支援者の私はどのようにサポートすれば良いのか分からなくなることがあります。当事者中心で、自分で考え、自分の意見を発言できる、そんな環境を支援することはとても難しいと感じてきました。

しかし、今回のピープルファースト大会で、大勢の前で発言される全国の当事者の方々を見て、私の考えは、ただの高慢な思いに過ぎなかったと深く反省しました。そして改めて、「支援」という言葉に違和感を覚えました。自分の目標を発表する人、福祉制度について怒りながら意見を述べる人、この大会で仲間が増えたことを喜ぶ人、皆さん自分の考えをしっかり持って目が生き生きと輝いていました。

今回の大会で色んなことを発見出来たことを大変感謝しています。めまぐるしく毎日が過ぎ、正直いって頭の中はパンク寸前なところもありますが、メンバーさんと毎日を「一緒に支え合って歩む」ことを忘れずこれからも頑張りたいと思います。（松岡　知子）

●障害当事者の方々と関わり始めて 17 年ですが、ピープルファーストなどの当事者活動に関わったのは今回が初めてでした。

率直な感想は「黙っていることがこんなに難しいなんて！」です。支援者が意見やアイディアを先回りで発信するのではなく、“当事者の方々の意思表示を待つ”こと、これが本当に難しいと感じました。質問や問いかけも工夫がなければ“意見を引き出す”こともできず、今までの自分の関わり方を問うことになりました。

大会では初めにルールが発表され、その一つが、「支援者は発言しないで下さい」でした。それを聞いた瞬間からものすごい緊張感に包まれました。全体会の司会進行役の寺田さん、宮田さんのサポートで私と島袋さんは舞台袖で待機。次々アドリブ(落とし物の案内、追加発表の紹介、時間が余り質問コーナー等)の依頼が舞い込みます。急いで原稿を書き二人に渡します。私が焦っても、当のご本人たちは“ドンとこい”といった様子で淡々とこなし、本当に頼もしい限りでした。

２日目の分科会も当事者の方の堂々とした進行や意見に感心しかありませんでした。２日間を終え、『当事者主体とは？』『支援者の在り方とは？』を深く考えることになりました。今後も当事者主体の活動に関わりたいと思っています。それだけ私にとって実りある２日間でした。（桃井　百合）

支援者の感想

第 25 回　ピープルファースト大会 in 大阪に参加して

●今回、初めてのピープルファースト大会でした。事前の準備も段取りも何もかもわからない所からスタートし、正直に言うと「これで大丈夫だろうか…？」と不安な気持ちを残したまま本番当日を迎えました。

でも、すべて杞憂に過ぎませんでした。　ゆうとおんバンドも、大ホールの 1000 人近い参加者の前でみなさん堂々と歌い、楽器演奏の姿はとても楽しそうで、会場から「アンコール！アンコール！！」の声が上がるほどの盛り上がりでした。全体司会を担当された宮田さんと寺田さんですが、当日は台本にないイレギュラーなことがたくさんあり、舞台袖にいた支援者の私たちは、ただただ焦っていましたが、二人は見事に大役をこなされました。

30 日の分科会も台本を読み込みしっかり練習されていたので、職員は時間配分など少しのフォローだけ。司会進行をみなさんキッチリこなされていました。閉会式のスローガンも、岩井さんは大人数の前で堂々と発言され、本当にすごいなぁ…と感心するばかりでした。参加者のみなさんは、この日のために何度も何度も練習し、本当に頑張っておられたと思います。その姿を傍で見ることができたのはとても貴重な時間でした。支援者の課題、考えさせられることはたくさんありました。いい経験でした。（島袋　美紗子）

支援の現場から

■グループ・ホームから

世話人の役割を考える

山本 寿

共同生活という一定の制約のなか、いかにして個々の生活観を大切に守っていけるか、私はそこに小規模ホーム世話人としての仕事の醍醐味と役割があると考えています。

日々ルーティンの繰り返しをベースに安定した生活を作っているAさんの場合、帰宅→部屋でTV←入浴→食事前服薬→食事→食後服薬→部屋でTV←20時ごろ就寝前服薬と生活時間が流れていきます。このリズムが崩れないように時間もきっちりしています。好きな野球中継を途中であきらめるくらいルーティンが優先します。なので、世話人の仕事の流れもAさんとしては一定気になります。この時間になすべきはずの仕事（食後には早めに洗い物をするはず？入浴後には浴室掃除にはいるはず？等）が都合によりなかなか実行されない場合など、いつやろうが結局はやるのだから大差ないといった支援者側の都合に同調できるほど柔軟性はないように思えます。すなわち、いつやるんだろう？ と気になってくるのです。

こんな場合、「まだやらないの？」とはなかなか言えません。でも気になる気持ちは続いたままということになります。

なんとなく馬が合わないと「悪い人とちゃうねんけど…」と遠回しの言い方で伝えてきたり、Aさんに限ったことではありませんが、総じてどの人も世話人には大変気を遣っていると感じます。

語彙が豊富で難しい言葉もよく知っているAさん。こういう時はこんな言い方で、ぴったりの場面で使える人です。ですが、私自身Aさんとのやり取りを通して、話は複雑にしないこと、曖昧な表現にしないこと、理屈っぽくしないことが肝要だと思ってきました。豊富な言葉に惑わされずあえてそれらを排除して聴くほうがAさんの考え方や感じ方のシンプルな骨組みが見えてくるように思うからです。

ホームはだれの暮らしの場か、言うまでもありません。その方の人となりを理解し、生活観を理解し、安心できる生活環境を作っていくことが世話人の大切な役割だと考えます。ひとの生活は千差万別。世間の価値観や常識、世話人の信じることや考えを押しつける場であってはならないと思っています。…と言いながら、よく私も失敗してから気づくのですが。

■日中活動の場から

支援の「一方通行」をめぐって

安井 仁

支援の「一方通行」あるいは「ズレ」のことですぐに想起される出来事は、かつての職場での「喫煙禁止支援？」です。当時Aさんは長年にわたる不摂生な生活と長い喫煙生活が原因で肺気腫を患っていました。そこで「彼の健康を守るために禁煙を進めていく！」との支援方針が出され、小生も当初はその方針に加担することとなりました。

しかし、日々のAさんに対する支援者の働きかけを観察すると「健康を守る！」との錦の御旗を掲げながら、実際に支援と称して行われてきた行為は一方的に禁煙を押し付ける極めて傲慢で差別的な内容のものでした（例えば、Aさんが煙草を吸いたい！買いたい！と主張すると「〇〇先生に言いますよ！」と脅す等）。そんなある日、愛煙家である小生が喫煙コーナーで煙草を吸っていたところへAさんがやってきました。Aさんは小生を見るなり、「煙草を分けてほしい！煙草の値段を教えてほしい」と懇願してきました。さすがに煙草を分けることはしませんでしたが、記憶力も衰えているAさんに対し、小生は悩んだ末、煙草の値段をメモ用

支援の現場から

紙に書いて手渡すことにしました。ところがその直後「みんながチームでＡさんの健康を守ろうとしているのに、安井さんはチーム支援を妨害している！Ａさんも禁煙を頑張っているのに！」との苦情を受けることになりました。怒り心頭のＢ職員に対し、小生は職員と利用者の間には厳然とした権力関係が存在していること(禁煙を頑張っているのは職員による脅しや禁煙以外に寿命を延ばす方法がないと医者や職員という権力者によって思い込まされている可能性があること)、禁煙を勧める場合でもＡさんに寄り添う態度が前提であること（例えば、禁煙に寛容な医師を職員が探し出す等）などを話しましたが、世の禁煙ファシズムや健康幻想も追い風となり、彼ら彼女らには小生の声は届きませんでした。

同じような出来事はゆうとおん内部でも十分起こり得る話だと思います。過剰に薬物を使用する医師に対し、疑いを持たない支援者個々の意識なども医師の意見を絶対的に信じて疑わないという意味では質的に同じものと思います。私たちの仕事はメンバー個々の困ったことや生き辛さに共感することが大前提なはずです（ここでいう共感とは、専門職として相手の病気や障害特性、生活歴等をしっかり理解した上で行動することで、決して同情を意味するものではありません）。また、福祉を担う専門職という自覚があれば、医師や看護師とも対等な関係であるはずです。専門職としての自覚を持ち続けるために、今後も悩み多き人生を送り続けたいと思います。

■相談支援の現場から

ズレを回避できた出来事

松野 香織

相談員にとって当事者理解は外せないことで、ご本人の思いとのズレが少ない生活を作るサポートをしていきたいと日々努めています。しかし、時にズレが生じたり、丁寧さが足りず反省することがあります。ここではリハビリを終え施設から地域生活に移行された方に関わる中で考えた事や感じたことを書かせて頂きます。

施設退所後どんな生活を具体的・現実的に構築できるのか、まずご本人やご家族の思い、考えを聞き取りました。そして生活のイメージを共有し、日中活動や生活の場の見学・体験をする中で活動場所を決定し、各所への調整や福祉サービスの申請…と順調に進んでいるかに思えました。ところが最終段階になってご本人が当初の選択肢とは別の一方を希望されていることが身近な支援者からの連絡で分かり、全て白紙に戻して始めからやり直したことがありました。

その時の私は「あぁ、言ってもらえて良かった」と安堵の気持ちで一杯でした。ご本人が決め周囲がそれに向けて動いている中で「いや、やっぱりこうしたい」と表明するには勇気が必要だったのではないかと思います。しかし、きちんと主張して下さったのですんでのところで大きく軌道修正でき、ズレたままの支援を回避できました。思えばこの時私は「グループホームが決まって良かった」等、福祉サービスの利用調整が上手くいきそうで相談員の役割が一定程度果たせているのではと思っており、ご本人の思いを再確認したり気持ちの揺れを共有することが出来ていませんでした。どんな時も当事者を中心に丁寧に気持ちを汲み取らなければ、ズレが大きくなったり一方通行の支援になると改めて強く心に刻んだ出来事でした。と同時に、はたして初期段階の「自己決定支援」が適切だったのか、相談員として振り返りが必要だと思いました。「思いや悩みを共有し希望に寄り添う提案をする」「当事者が納得し自己決定できる形での支援を心掛ける」ことは相談員の役割のひとつです。今後も「思いや悩みの共有」に出来るだけズレが生じないように日々努めていきたいと思います。

■現場の悩みを一緒に考える

小さな変化を通して

特定非営利法人活動法人ラルゲット　豆子（西尾）寿士
公認心理士・相談支援専門員

シリーズ第３回目は、変化・行動変容について考えてみたい。困難な成人事例に関わる場合、激しい自傷あるいは他害の問題に出会うことが多い。とりわけ家族間での他害行為については、激しさがエスカレートして出口の見えない悪循環となる場合がある。ご家族が心身ともに疲れ切ってしまうことが少なくない。

自閉症圏の障害を持つ人の場合、母親は特別な存在である場合が多い。幼少期より他者との関係性を形成する困難さを抱えてきた児とその母親は、懸命な育児等の関わりのなかで一つのユニットとなり、子どもから見た母親は自分のことをなんでも理解し欲求を満たしてくれる存在となりやすい。

思春期になり、子どもの身体は大きく変化し、欲求も多様化してくる。それまで障害に関する情報・知識を集めながら工夫を続けなんとか乗り切ってきたご家族は、子どもの暴力や強いこだわりに付き合えなくなり、制止・抑止することも困難となる。

子ども（当事者）側から見れば、からだの変化や環境の変化に順応することが大変であるばかりか、母親がこれまでのように欲求を満たしてくれないという葛藤を抱えていくこととなる。

知的な障害を合併している自閉症圏の障害を持つ人にとっては、心の葛藤を抱えることは大変なストレスとなる。その葛藤をうまく処理できない場合に暴力となって排出されることが多くなり、その対象が母親に向かいやすいのは前述の通りである。

こうした悪循環を抜けだす道は、家族が問題を抱え込まずに相談することから始まる。話を聴く支援者は、苦しんできた家族に寄り添い、苦労をねぎらいながら、これからは信頼できる支援機関にお子さんのことを託して、距離を取ることをお勧めする。相談すること、子どもと距離を取ることは、親子関係に微妙な変化を生み出し、また支援者による助言で家族の関わりなどが少し変化（言葉のかけ方、一日の流れなど）することで、他害行為が減少していく場合も多い（もちろん簡単には解決しない深刻な事態もあり、緊急的に親子を分離する支援事例もある）。少しの変化で大きな結果となるのである。家族が安心することで当事者にもそれが伝わり落ち着いた生活に戻り、家族もそれで余裕を取り戻すことで、当事者のこだわりや欲求にも付き合える幅が広がるなどの好循環へと転換していくのである。

最後に、困りごとを相談するというのは容易なことではない。勇気を出して相談してみたが何の成果も得られず「身内の恥」を晒すだけであった等の負の感情を抱いているご家族もおられる。折角の機会を逸してしまわないように、支援者側の聴く姿勢が常に問われていることを肝に銘じなければならない。

ポップコーンや綿菓子は子ども達に大人気

「きめる会」は活動費のために飲み物を販売

注文に応じきれない！必死で焼きそばを作る二人

12/7

ゆうとおん まつり

恒例の「なに ゆうとおねん まつり」は、晴天に恵まれ、地域の子どもたちも参加してにぎやかで楽しい一日になりました。

これから「演劇」が始まるところ

紙すき・さをり体験。子ども達が参加

ゆうとおんバンドの始まり！さあ、みんな、いくよ～

●当世作業所事情 77

今日の晩ご飯はどこで食べるの？

畑 健次郎

11月29日と30日の2日間、ピープルファーストの第25回全国大会がありました。会場からは「障害者である前に人間だ」という、当事者主体の心意気が伝わってきます。

一日目の全体集会を終えて帰路に就く前、ゆうとおんのメンバーはいったん会場の出口付近に集まりました。しばらくして、まだ来ていない人たちがいたので、私は様子を見に行くことにしました。担当のAくんとBくんには、「みんなといっしょに、ここに居ててな」と言って会場に戻りました。残っている人の状態を確認してすぐ戻りましたが、Aくんが見当たりません。Bくんに「Aくんはどうしたん」と聞くと、「知らない」というジェスチャーを返してきます。お腹の調子が悪かったので、トイレかなと思って探しましたがどこにも居ません。土橋さんが「交流会(夕食会)の会場についていったんと違う？」と言います。ひょっとしたらと思い、急ぎ足で交流会場のホテルに向かいます。

以前は月に一度くらいの割合で交通機関を利用して、AくんやBくんを含むメンバーたちといろんなところに出かけていました。3・4人のメンバーに対して職員・支援者が一人くらいの態勢でした。時々、迷子を出しました。

ある時、一対一で出かけたにもかかわらず、私の不注意でCくんを迷子にしてしまいました。Cくんは交通機関を利用して大阪市内の養護学校（現支援学校）の高等部に通っていた人で、名前も住んでいるところもはっきり言える人でした。立ち寄り先を探しましたが、どこにも居ません。日が暮れると、職員に加えて他の仕事を持つ支援者も夜遅くまで探し回りましたが、見つかりませんでした。

翌朝、警察から連絡があって駆け付けました。道路端にしゃがみ込んでいたCくんを見た通行人が、警察に連絡したとの事でした。その場所は探し回っていた時に通った場所でした。

それでも懲りずに、私たちは大阪城公園やナンバに繰り出しました。リスクは減らしたいと思いましたが、「リスクをなくす」という発想はありませんでした。やがて交通機関を利用して気軽に外出するには、人数が多くなりすぎるようになりました。

そんなことを思い出しながら、ホテルに足を踏み入れました。

Aくんはホテルのロビーの柱にもたれてしゃがみ込んでいました。そういえば全体集会の終わりころ、私の左隣にいたAくんが、箸を持つ格好で両手をさかんに上下させていました。私の右隣は聴覚障害をもつDくんでした。Aくんの身振りを見て、私は手話を連想しました。AくんはDくんのことを気遣っているのだと解釈しました。Dくんは熱心に壇上を見ています。私は右手を左胸から右胸に移動させて、Aくんに「大丈夫」のサインを送りました。

Aくんは「分かった」という表情を返してきました。あの時、きっと「晩ご飯はどこで食べるのか？」と問うてきたのです。彼は私から「大丈夫、みんなで食べに行く」という返答を受け取ったのだと思います。

「ごめんな。ご飯は家に帰って食べるねん」

Aくんは寛大にうなずき、少し疲れた足取りでしたが、歩いてきた道を私と一緒に戻りました。

●

少し遡って、その週の火曜日、いつものようにテレビの前でウトウトしていていました。ふと目が覚めると「プロフェッショナル」という番組が流れていました。カメラは弁当作りの料理人である山本千織さんを追いかけています。山本さんは「忙しくて楽しい」のがいいと言います。そういえば、ゆうとおんがまだ「組織」以前の「集団」だった頃、忙しくて楽しかったなあと少ししんみりします。

私たちは、ゆうとおんをつくる時、できるだけ平場の関係を築いていきたいと思いました。ゆうとおんの日常を構成するメンバー（当事者・職員）全員をスタッフと呼んでいました。

ピープルファーストで、ゆうとおんの当事者たちが担当したのが、「わたしのしごと」という分科会でした。私の耳に届く声からは、積極的に、あるいは少しはにかみながら、彼らは自分の仕事への誇りや愛着を語っていました。もちろんお金のことも話題になっていました。当事者からすれば、職員と比べて、この格差はなんだともっと怒ってもいいはずですが、みんな意外と穏やかでした。一方の職員は、自分たちの安月給については気を揉んでいますが、当事者の取り分については、さして気に留めている感じはありません。

支援の対象として記録をとり、支援計画を練るのもいいのでしょうが、労働者としての仲間意識や、生活者としての彼らの思いに寄り添うという姿勢が第一のような気がします。個々人に対する精緻な観察や支援計画の充実が、当事者の人権を守り、虐待をなくす鍵だという論調もあるようです。それも一理あるのでしょうが、私の腑にはストンと落ちてきません。

専門性や知識の前に、何より必要な資質は、共感力、共振力だと感じます。「あんたとオレ」、「あなたとわたし」の間にあるわからなさや、わかりあいたいという思いや、どうしようもないわだかまりたちのせめぎあいのなかからしか、おたがいさまの世界は見えてきません。彼らの悔しさや楽しみやもどかしさを、自分のそれと突き合わせたり、かき混ぜたりする作業は、「現場」でしか味わえない「面白さ」だと思います。

●

ずっと昔、労働組合の書記をしていたことがありました。若者の私は、この社会の不公平、不自由さを何とかしたいともがいていました。

労働者階級のたたかいこそが、この矛盾に満ちた社会を変えていく原動力だと素朴に信じていました。

私が取り組みたいと思っていた労働運動は、中曽根元首相たちのような国家主義者や、格差を気にも留めない新自由主義者たちの国家戦略の前で、どんどん弱体化していきます。今や多くの労働組合は、労働者を抑圧する装置の一つと化している感さえあります。

そうした中で、私が学んだ唯一のことは、「個」にこだわりつづけるということでした。個人を犠牲にしたどんな正義も信じてはいけないという信条のようなものでした。認識としての階級や仲間、組織という概念は必要かも知れないけれど、「私でありつづけることのできる私たち」を超える私たちは、往々にして正義を振りかざして、自分たちの正義を他者に押し付け、個々の人間を抑圧していきます。

ゆうとおんは「スモール・イズ・ビューティフル」という姿勢と、「スケールメリット」という実益の間で揺れてきました。

グループとしてのスケールメリットはある程度維持しつつ、分権型の仕組みを考えていかねばならない時期に差し掛かっているような気がします。

今、理事会ではゆうとおんが抱えている事業をゼロベースから見直す作業にとりかかろうとしています。そのための議論の入り口まで来ています。私の怠慢もあってのろのろした歩みですが、どんな集団でありつづけたいのか、きちんと提起できるようにしたいと思っています。

さてその先です。

どこかの番組で「やっぱり引き際が大事やないですか」と発言していた人がいました。でも生きている限り、必ず「次」があります。どんな次が待っているのか、少し楽しみでもあり、不安でもあります。

「プロフェッショナル」に出ていた山本さんは、仕事に対する姿勢として「最後まであがく」と言っていました。どうあがいても結果は変わらないかも知れないし、時にはかえってまずい結果になるかもしれません。それでも、その姿勢には共感します。

当面は、もう少しあがいてみてもいいかなと思っています。

一九九一年 九月三日 第三種郵便物承認 毎月（一・二・三・四・五・六・七・八の日）発行 定価５０円

2/15(土)　実践から 学ぶ・気づく・考える

地域生活を支え続けるために、私たちができること

■１部　事例報告　13：00～

まだ少ない強度行動障害や自閉症の方の「一人暮し」。近隣トラブルや他害行為など困難に直面した時にどう乗り越えるのか、ご本人の「生きづらさ」に向き合ってきた現場の「実践」に学びます。

富田 忠一さん （奈良・ちいろば会）　豆子 寿士さん（城東区・ラルゲット）
廣澤　新平さん（生野区・出発のなかまの会）

■２部　講演

「罪を犯した知的障害のある人の地域生活支援における課題」
＝「支援者」を支援する滋賀県の取り組みから見えてきたこと＝
講　師　　中川 英男さん　（滋賀県社会福祉士会　会長）

■場　所　八尾市生涯学習センターかがやき　視聴覚室
■参加費　５００円（資料代）
■定　員　７０人　先着順　FAX・メールで申し込み
■主　催　社会福祉法人ゆうとおん
FAX072-993-0784　メール youtone@live.jp

みんなで新年を祝いましょう！

もちつき大会

1月 13 日（月）
時間　11：00～
場所　ほーぷ　ぜんざい･豚汁など

事例検討会

1 月 25 日（土）

- 11：00～17：00
- 場所　はーと
- 対象　ゆうとおん職員

社会福祉法人　ゆうとおん

本　　部 / 〒581-0834 八尾市萱振町 2-133　TEL 072-993-0785　FAX 072-993-0784
ゆうとおんはーと / 〒581-0834 八尾市萱振町 7-68-1　TEL 072-926-6200　FAX 072-926-6199
ゆうとおんうぇーぶ / 〒581-0817 八尾市久宝園 2-30-4　TEL 072-926-1543　FAX 072-921-8883
ゆうとおんほーぷ / 〒581-0834 八尾市萱振町 7-73-2　TEL072-927-1300　FAX 072-927-1301
スタコラハウス / 〒581-0802 八尾市北本町 1-1-11　TEL 072-995-4387　FAX 072-995-4387
メールアドレス / youtone@live.jp　ホームページアドレス http://www.eonet.ne.jp/~youtone
年会費 / 1 口 2.000 円　振込先 / 郵便為替口座 00910-9-106532
発行人 / 関西障害者定期刊行物協会　大阪市天王寺区真田山町 2-2 東興ビル 4 階
定　価 / 50 円